慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鐘山改名の由来について : 蒋子文と孫鐘の伝説をめぐって
Sub Title	Origins of the renaming of Zhong Shan: on the legends of Jiang Ziwen and Sun Zhong
Author	吉永, 壮介(Yoshinaga, Sosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2003
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.85, (2003. 12) ,p.66- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00850001-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鍾山改名の由来について

――蒋子文と孫鍾の伝説をめぐって

吉永　壮介

南京市の朝陽門外にある鍾山は、蒋山とも呼ばれ、現在でも孫文の陵墓のある紫金山として名高い。清・顧祖禹『読史方輿紀要』巻一九は、鍾山と蒋山というこの二つの山名について、こう記している。

> 吳大帝祖諱鍾、因改曰蒋山。以漢末秣陵尉蒋子文逐賊有功、死葬於此、因名。

鍾山の名が蒋山に改められた理由について『読史方輿紀要』には、「呉の大帝孫権の祖父は諱を鍾といい、そのため鍾山の名を改めて蒋山とした」という説と、「漢末、秣陵の尉であった蒋子文は、賊を追って功績があり、死ぬと鍾山に葬られ、そのため蒋山と改めた」という二説が併せ記されている。しかし、鍾山の山名改変の由来は、もともとは蒋子文の伝説によるものとして伝えられ、孫権の祖父とされる孫鍾がその由来に加わったのは後代のことであると思われる。本稿では、蒋子文と孫鍾の伝説の原型を確認したうえで、各時代に於ける鍾山改名の由来の説明をたどり、その変

遷の理由について考察する。[1]

一、蒋子文の伝説について

蒋子文は後漢末の人物とされ、晋・干宝の二十巻本『捜神記』巻五にその名が見える。鍾山改名に関わる逸話の大要を示すと、以下の通りである。

蒋子文は元来、酒、色事が大好きなうえに軽はずみな性格で、日頃から「わしの骨はすでに清らかで神聖なものになっているから、死んだ後には必ず神になるだろう」と言っていた。秣陵の尉であった蒋子文は、賊を追って鍾山のふもとにまで至ったとき、額に傷を受け、その傷がもとで間もなく死んでしまった。死後、孫権が呉の帝位に即いた後に、蒋子文はたびたびその姿を現し、「わしは呉の孫氏に恵みをもたらしてやろうというのだから、神として祀れ、さもないと禍をなすぞ」と脅しをかけ、その言葉通り疫病や火災を頻発させた。はじめは蒋子文が神になったなどとは信じていなかった孫権も、ついには蒋子文の廟を建てて祀ったうえ、その名にちなんで「鍾山」を「蒋山」に改めた。[2]

この鍾山改名の由来に関する故事の他にも、二十巻本『捜神記』は計五話、蒋子文の逸話を載せている。蒋子文への信仰は、南朝宋の武帝の永初二（四二一）年に淫祠邪教として一時禁止された。[3]しかし全体としてみれば南朝期を通じてその信仰は非常に盛んであり、『太平広記』を経て、[4]やがて李文蔚の雑劇「蒋神霊応」へと継承されていった。

二、孫鍾の伝説について

盛んな信仰の対象となった蒋子文に対して、もう一方の孫鍾は、三国呉の大帝孫権の祖父とされるにも関わらず、その出自は定かではなく、晋・陳寿『三国志』にもその名は見えない。但し、『三国志』巻四十六、呉書「孫堅伝」裴松之注引『呉書』に、呉の建国説話とも言うべき伝説が記されている。曰く、孫堅の先祖代々の墓には五色の雲気が漂っていた、孫堅の母がみごもったときに自分の腸（はらわた）が飛び出して呉の昌門に巻き付く夢を見た、云々。[5] 呉の城門に腸が巻き付くという夢の話は、前秦・王嘉『拾遺記』巻八にも採録されており、当時知られた話であったことがうかがわれる。[6]

しかし、『三国志』裴注、及び『拾遺記』は、いずれも孫堅の父としての逸話を記しているだけで、孫鍾という名そのものは記していない。孫鍾の名が文献上に初めて現れるのは、南朝宋・劉敬叔の手になる『異苑』である。『異苑』巻四に見える孫鍾の逸話の大要を以下に記す。

孫鍾は孫堅の父、すなわち孫権の祖父であり、母親とともに暮らしており、性質は至孝にして、思いやりのある人物であった。ある時、瓜の栽培を生業としている孫鍾のもとに、身なりのよい三人の少年が訪れ、瓜をくれるよう求めた。孫鍾が食事の支度をして瓜を供し、慇懃にもてなしたところ、三人の少年は去るにあたって、自分たちが人の生死を司る司命の神の部下であることをあかし、孫鍾に「あなたの子孫が代々諸侯でいられるのと、数代だけでも皇帝になれるのと、どちらを望むか」と尋ねる。孫鍾が「数代の皇帝の方がよい」と答えると、三人の少年は孫鍾に墓地とするべき場所を指定し、そして門を出ると白い鵠（くぐい）と化して飛び去った。[7]

『異苑』に端を発する孫鍾の伝説は、唐代の『北堂書鈔』『初学記』『建康実録』にも見え、それらの記述は『呉書』『幽明録』『祥瑞志』等から引用されたものである。[8]『呉書』以下、引用された書はいずれも散佚しており、今日その全貌を知ることはできないが、六朝期には孫鍾の伝説もある程度知られていたことであろう。そして孫鍾の名を記す唯一の正史である『宋書』巻二七「符瑞志上」は、孫鍾に関する伝説をまとめて採録しており、そこには「至孝」「瓜」「三人の少年によって墓地とすべき場所を定められた事」「孫氏の墓の上に五色の雲気が漂う話」「孫権の母親の腸が城門に絡まる夢」、これら全ての話が取り込まれている。[9]

孫鍾の伝説の各要素について概観してみると、まず「腸が呉の昌門に巻き付いた」という奇怪な夢に関しては、『宋書』「符瑞志上」に、「後漢末、献帝の興平年間に「昌門が開き、天子が現れる」という童謡が流行していた」と見え、符瑞との関連による説話である事が示されている。[10]

孫鍾が瓜を植えていたという話は、後代よく知られていたらしく、『三国志平話』巻下では、呉の孫権から縁談を持ちかけられた関羽が使者に向かって、「わしの娘は龍虎の子だというのに、どうして瓜を植えていたやつの子孫などに嫁がせられようか」と言う一幕もある。[11]

ところで呉には、『述異記』巻下に「五色の瓜が生じた」という話が見えるように、[12]「瓜」にまつわる逸話が少なくないが、概して「瓜」は「貧困」を連想させることが多い。孫鍾に近い時代では、『三国志』巻五二、呉書「歩騭伝」に、中原の戦乱を避けて江東に移り住んだ歩騭が、困窮して瓜を植えて自給しつつ学問に励んだという話が見える。[13]そして「瓜」と「貧困」のイメージが「孝子」に結びつく例が、『後漢書』巻四六注引謝承『後漢書』の施延の逸話にも見える。[14]後漢は親への「孝」が非常に重視された時代だが、やがて「孝」は皇帝への「忠」へと重なり合わさってゆく。そ

うすると、従来は皇帝ただ一人が天との関わりを持ち、そこに瑞祥がくだされていたのだが、皇帝以外の人々にも「忠」と重なった「孝」を通して天と通じる可能性が生じ、そこに瑞祥との接点が予感されることになる。[15] 孫鍾の場合も、「瓜」「貧困」「孝子」という階梯を踏み、司命神の使いに墓地とすべき場所を指定される、という瑞祥に巡り会えたのである。孫鍾と同じく、「瓜」「貧困」「孝子」から瑞祥に導かれた例に、『南斉書』巻五十五「孝義列伝」に見える韓霊敏兄弟の話がある。[16]

尚、『異苑』では、孫鍾は孫堅の父、すなわち孫権の祖父とされるが、『宋書』では孫堅の祖父、すなわち孫権の曾祖父とされる。六朝期にすでに叙述が混乱している事からも、実在の人物としての孫鍾の資料の曖昧さがうかがわれる。後代、『芸文類聚』『建康実録』『事類賦』等の諸書は孫鍾を孫堅の父、孫権の祖父であるとしているが、『太平御覧』は巻五五九と巻九七八でともに『幽明録』を引きながら、一方では孫堅の祖父とし、一方では孫堅の父としているという混乱も見られる。[17]

三、鍾山を蒋山に改名した由来の変遷について

蒋子文と孫鍾の伝説について概観したが、次に鍾山を蒋山に改名した由来に関する説明が、時代を追ってどのように変遷したのかをたどってみたい。

（一）晋から北宋までに見られる鍾山改名の由来

鍾山を蒋山に改めたという最も古い記述は、前述の通り二十巻本『捜神記』巻五「蒋子文」の条に見える。蒋子文の

故事による鍾山改名の伝説は、『搜神記』を皮切りに、唐代の類書『北堂書鈔』『芸文類聚』『初学記』、そして『元和郡県志』にも記載されている。[18]『芸文類聚』『初学記』は孫鍾の故事も記しているが、鍾山改名の由来に関しては蔣子文の故事のみにしか触れていない。また、建康に都を置いた六朝の事跡を記した、許嵩『建康実録』巻一にも孫鍾の名が見えるが、孫鍾と鍾山改名の由来とを結びつけてはいない。『蒙求』巻下も『幽明録』を引いて「孫鍾設瓜」の項を立てているが、鍾山改名の由来には触れていない。これらのことから、唐代にはまだ鍾山改名は蔣子文の故事によるという説のみが知られ、孫鍾と関連をもって語られてはいなかったことが分かる。

時代がくだり、北宋の『太平御覧』『太平広記』も蔣子文と孫鍾の双方の故事を載せているが、鍾山改名に関しては、孫鍾ではなく、やはり蔣子文の故事を理由としている。[19]『太平寰宇記』巻九〇でも同様に蔣子文の故事によるとしていることから、唐に引き続き北宋までは鍾山改名の由来は蔣子文一色であり、孫鍾の名は関わっていなかったことが分かる。

（二）南宋以降に見られる鍾山改名の由来

ところが、南宋に入ると様相に変化が見られる。南宋の比較的早期に編まれた張敦頤『六朝事跡編類』は、以下のように記す。

『呉録』云、大帝祖諱鍾、因改名曰蔣山。（巻上）

『金陵圖經』云、（中略）權避祖諱、因改鍾山曰蔣山。（巻下）

鍾山改名の由来について、「孫権の祖父・孫鍾の諱を避けた」という説がここに現れる。当該箇所の直前ではいずれも蒋子文の故事に触れているにも関わらず、鍾山改名に関しては、意図的に「孫鍾の諱を避けた」という説のみを記している。ちなみに『呉録』『金陵図経』はすでに散佚しており、今日その全貌を知る事はできないが、『六朝事跡編類』が引く内容が本当に『呉録』に拠るものだとすれば、三国直後の晋代にはすでに、孫鍾が鍾山改名の由来に絡んでいた事になる。しかし既に見たように、唐代の『北堂書鈔』『建康実録』、北宋の『太平御覧』[20]は、いずれも『呉録』を引用しているにも関わらず、孫鍾と鍾山の改名を結びつけているものは見当たらない。この事から、『呉録』に見られるという孫鍾と鍾山改名を結びつける記述は、実際には『六朝事跡編類』による引用の誤りか、もしくは改竄の可能性が高いものと思われる。あるいは、孫鍾を鍾山の改名と結びつけたのは、『金陵図経』か『六朝事跡編類』自身ではなかっただろうか。ともあれ、出典の信憑性はひとまず措くとしても、南宋早期に至ってようやく鍾山改名と孫鍾の諱が繋がりをもって語られる事になったことが確認できる。やや時代のくだった周応合『景定建康志』巻一七が「大帝祖諱鍾、因改名曰蒋山」と記しているのも、この流れの上にある。

しかしこの時期、一つの混乱が生じている。『六朝事跡編類』とほぼ同時期に編まれた曽極『金陵百詠』は、鍾山改名に関して、

『輿地志』古曰、（中略）子文祖諱鍾、因改曰蒋山。

と記す。この『金陵百詠』の他にも、南朝陳・顧野王『輿地志』の与えた影響は大きく、『通鑑綱目』『方輿勝覧』『輿地紀勝』がいずれも『輿地志』を引き、「蔣子文の祖父の諱が鍾であったため、鍾山を蔣山に改めた」という説を紹介している。[21]

鍾山改名の由来は、北宋までは「蔣子文の故事による」ということで一致していたが、南宋に入ると「孫権の祖父の諱を避けた」という説と、「蔣子文の祖父の諱を避けた」という説とが入り乱れる様相を呈する。「蔣子文の祖父」が鍾山改名の由来に絡むのは、『輿地志』に拠れば南朝期にまで遡れることになるが、その出現があまりにも唐突な感があるのは否めない。こうした些か錯綜した形勢が続くなかで、宋末元初の胡三省は、『資治通鑑』巻九四の注で次のように述べている。

『輿地志』曰、（中略）子文祖諱鍾、因改曰蔣山。予謂孫權祖亦諱鍾、當因是改也。

胡三省は、『輿地志』の「蔣子文の祖父の諱を避けて改名した」という説を引いた後に、「私が思うに孫権の祖父もまた諱を鍾といったので、それによって山の名を改めたのでたろう」と述べている。「予謂（われおも）へらく」という言い回しから、当時は「蔣子文の祖父の諱を避けた」という解釈が主流であったのに対して、胡三省自身の考えによって訂正を行おうとしたニュアンスを汲み取る事ができるであろう。『資治通鑑』胡三省注は、この巻九四の他にも巻一二七、巻一六一、巻一七七で鍾山改名の由来について触れており、いずれも「孫氏の祖の諱を避けて山の名を改めた」という説を述べている。[22]繰り返しなされたこれらの記述を、当時広まっていた「蔣子文の祖父の諱を避けた」という説を胡三省が否定し

ようと力説した痕跡と見ることができよう。

そしておそらくこの『資治通鑑』胡三省注が決め手になったのであろう、南宋以後、元から明にかけて、『至大金陵新志』巻一、巻五上、『山堂肆考』巻一六、一三九、一四九[23]、『天中記』巻七、『文章弁体彙選』巻五七五、宋濂「遊鍾山記」、『図書編』巻六〇等、鍾山改名の由来について、多くの書が「孫権の祖父の諱を避けた」という説を支持する趨勢となった。『分類補註李太白集』巻七や『大明一統志』巻六のように「蒋子文の祖父の諱による改名」という説を載せているものもあるが、明・陳耀文『天中記』巻七は「蒋子文の祖父の諱を避けた」という説を誤りであると論断し[24]、『江南通志』も胡説を支持し[25]、かくて鍾山改名の由来に関する説明は、「孫権の祖父の諱を避けた」という説が主流となる趨勢を見せた。

四、結語

以上、蒋子文と孫鍾の伝説及び鍾山改名の由来の説明が、いかなる変遷をたどったかを概観した。孫鍾は大帝孫権の祖父であるとされながらも実像が定かでなく、『三国志』及び裴注にも見えず、あくまでも志怪小説と符瑞の関連でしか語られることがなかった。ところが、すでに広まっていた蒋子文の故事に便乗するような形で、南宋期に再びその名が現れた。孫鍾の伝説に見える「瓜」「至孝」「符瑞」等の要素は、もとより後漢から魏晋南北朝の価値観の中で育まれ伝承されたものである。しかし、その逸話の内包する思想とは必ずしも密接には関わらない位相で、孫鍾の名は再び浮上し、胡三省の『資治通鑑』注以後は、まるで以前から歴史上の人物として存在し続けたかのように記述されるようになった。孫鍾が実在の人物としてどのようであったか、また鍾山改名が事実としてどのような由来を持つのか、とりわ

け「蔣子文の祖父」が出現した時期と理由に関しては疑問も残るが、より注目に値するのは、孫鍾の名が再浮上したのが南宋期であったという点であろう。

地方政権に甘んじざるを得なかった東晋では、正閏論の議論に於いて三国のうち蜀を正統とする論調が強まった事は『四庫全書総目提要』にも見える通りで[26]、その事情が南宋にも通じている点については既に贅言を要さない。また、史観のみならず、民間芸能や雑劇、そして『三国志平話』や『三国演義』等の小説の世界に於いても、蜀贔屓の論調は一層顕著である。かくて、イデオロギーとしては魏と蜀のいずれを正統とするかが議論され、民衆の感情としては蜀への共感が主流となる中で、呉に対する興味や共感は概して希薄であったと言える[27]。そうした中で、南宋期に孫鍾の伝説が拾い上げられ、新たな解釈をくだして歴史に取り込まれたのには、都を同じくし地理を紐帯とした、呉への潜在的な連帯感が働いていたことも理由とされ得るであろう。鍾山改名の由来の変遷は、呉の人物に対する積極的な共感、或いは再評価と言うには遠いかも知れないが、しかし南方の地理的ナショナリズムとも言うべき潜在的な感情が、期せずして発露された事例であると言えるであろう。

注

（1）本稿は二〇〇三年六月一八日、慶應義塾大學藝文學會に於いて行った口頭発表をもとに、加筆訂正したものである。注に附した原文は、『搜神記』『異苑』は「学津討源」、『拾遺記』『述異記』は「増訂漢魏叢書」、『三国志』『宋書』は中華書局標点本、『三国志平話』は鍾兆華氏『元刊全相平話五種校注』（巴蜀書社）、『山堂肆考』『天中記』『江南通志』は「四庫全書」に拠った。尚、本稿では「三国蜀」「三国呉」をそれぞれ「蜀」「呉」と記す。

（2）蔣子文者、廣陵人也。嗜酒好色、挑達無度。常自謂、「己骨清、死當爲神。」漢末、爲秣陵尉、遂賊至鍾山下、賊撃傷額、

因解綬縛之、有頃遂死。及吳先主之初、其故吏見文于道、乘白馬、執白羽、侍從如平生。見者驚走。文追之、謂曰、「我當爲此土地神、以福爾下民。爾可宣告百姓、爲我立祠。不爾、將有大咎。」是歲夏、大疫、百姓竊相恐動、頗有竊祠之者矣。文又下巫祝、「吾將大啟祐孫氏、宜爲我立祠。不爾、將使蟲入人耳爲災。」俄而小蟲如塵眞、入耳、皆死、醫不能治。百姓愈恐。孫主未之信也。又下巫祝、「若不祀我、將又以大火爲災。」是歲、火災大發、一日數十處。火及公宮。議者以爲鬼有所歸、乃不爲厲、宜有以撫之。於是使使者封子文爲中都侯、次弟子緒爲長水校尉、皆加印綬。爲立廟堂。轉號鍾山爲蔣山、今建康東北蔣山是也。自是災厲止息、百姓遂大事之。

(3) 宋武帝永初二年、普禁淫祠。由是蔣子文祠以下、普皆毀絶。孝武孝建初、更修起蔣山祠、所在山川、漸皆修復。明帝立九州廟於雞籠山、大聚羣神。蔣侯宋代稍加爵、位至相國、大都督、中外諸軍事、加殊禮、鍾山王。蘇侯驃騎大將軍。四方諸神、咸加爵秩。(『宋書』巻一七「礼志四」)。

(4) 『太平広記』巻二九三「蔣子文」は『搜神記』『幽明録』『志怪』等に、巻四七三「蔣蟲」は『搜神記』『幽明録』に拠る。また『搜神記』『幽明録』等から切り貼りする形で編まれたものに「蔣子文伝」がある。

(5) 吳書曰：堅世仕吳、家於富春、葬於城東。冢上數有光怪、雲氣五色、上屬于天、曼延數里皆往觀視、摯父老相謂曰：「是非凡氣、孫氏其興矣。」及母懷姙堅、夢腸出繞吳昌門、寤而懼之、以告鄰母。鄰母曰：「安知非吉徵也。」堅生、容貌不凡、性闊達、好奇節。

(6) 孫堅母姙堅之時、夢腸出繞腰、有一童女負之、繞吳閶門外。

(7) 孫鍾富春人、堅父也。與母居至孝篤性、種瓜爲業。忽有三年少容服妍麗、詣鍾乞瓜。鍾爲設食、出瓜、禮敬慇懃。三人臨去曰、「我等司命郎。感君接見之厚。欲連世封侯、欲數世天子。」鍾曰「數世天子、故當所樂。」因爲鍾定墓地。出門、悉化成白鵠。尚、『異苑』は続けて、孫堅が「皇帝がいい」と選択したという説も載せる。

(8) 『北堂書鈔』巻一五一引『吳録』、『初学記』巻八引『幽明録』、『建康実録』巻一引『祥瑞志』。

(9) 孫堅之祖名鍾、家在吳郡富春、獨與母居。性至孝。遭歲荒、以種瓜爲業。忽有三少年詣鍾乞瓜、鍾厚待之。三人謂鍾曰：「此山下善、可作冢、葬之、當出天子。君可下山百步許、顧見我去、即可葬也。」鍾去三十步、便反顧、見三人並乘白鶴飛去。鍾死、即葬其地。地在縣城東、冢上數有光怪、雲氣五色上屬天、衍數里。父老相謂此非凡氣、孫氏其興矣。堅母任堅、夢腸出繞吳昌門。以告鄰母、鄰母曰、「安知非吉祥也。」昌門、吳郭門也。堅生而容貌奇異。(中略)獻帝興平中、

呉中諺言、「黄金車、斑闌耳。開昌門、出天子。」

(10) 三国時代の符瑞・讖緯を論じたものに、平秀道氏「魏の文帝と図緯」(『龍谷大学論集』四〇四号、一九七四年)、「蜀の昭烈帝と讖緯」(『龍谷大学論集』四〇九号、一九七六年)がある。

(11) 吾乃龍虎之子、豈嫁種瓜之孫。

(12) 呉桓王時、會稽生五色瓜、呉中有五色瓜、歳充貢伏獻。

(13) 歩騭字子山、臨淮淮陰人也。世亂、避難江東、單身窮困、與廣陵衞旌同年相善、俱以種瓜自給、晝勤四體、夜誦經傳。

(14) 延字君子、蘄縣人也。少爲諸生、明於五經、星官風角、靡有不綜。家貧母老、周流傭賃。常避地於廬江臨湖縣種瓜、後到呉郡海鹽、取卒月直、賃作半路亭父以養其母。

(15) 大橋由治氏「『搜神記』と孝子説話について」(大東文化大學『漢學會誌』第三十六號、高田教授・内山教授退休記念號、平成九年)参照。

(16) 韓靈敏、會稽剡人也。早孤、與兄靈珍竝有孝性、尋母又亡、家貧無以營凶、兄弟共種瓜半畝、朝採瓜子、暮已復生、以此遂辦葬事。注:両「瓜」字南監本、殿本、局本及『南史』並作「瓜」。按「瓜」之作「瓜」、猶「園」之作「薗」也、唐代官文書尚如此。

(17) 晋から北宋にかけての史書、志怪小説及び類書で、「孫鍾は孫堅の父(孫権の祖父)」とするものに、『異苑』巻四、『芸文類聚』巻八七、『建康実録』巻一、『事類賦』巻二七、『太平御覧』巻九七八がある。また、「孫鍾は孫堅の祖父」とするものには、『宋書』巻二七、『太平御覧』巻五五九、『咸淳臨安志』巻八七がある。

(18) 『北堂書鈔』巻一六〇、『芸文類聚』巻七、七九、『初学記』巻八、『元和郡県志』巻二六。

(19) 『太平御覧』は、巻五五九、九七八でともに『幽明録』を引いて孫鍾に関する逸話を載せるほか、巻三六〇、三七一、三七六、三九八等で『呉録』『呉書』を引いて「腸が飛び出して城門にからまる夢」を載せているが、鍾山改名の由来に関しては、巻四一、巻八八二でいずれも蒋子文の故事のみを記している。また『太平広記』巻三八九は『祥瑞記』を引いて孫鍾の逸話を載せているが、鍾山改名に関しては巻二九三で『捜神記』『幽明録』『志怪』等から引いた蒋子文の逸話をその由来とする。

(20) 『呉録』の佚文を輯めた詳細な論考に、松本幸男氏『張勃呉録考(附増補呉録地理志)』(『學林』第十四・十五號、白川

靜博士傘寿記念論集、平成二年）、『續張勃吳録考（附 吳録紀傳）』（『學林』第十六號、平成三年）があるが、『六朝事跡編類』は拾われておらず、孫鍾と鍾山改名を結びつける佚文は見えない。また、明・陳燿文『天中記』巻七は、『吳録』からの引用として「孫権の祖父の諱」の説を紹介しているが、他の箇所で『六朝事跡編類』を引いていることもあり、当該箇所の『吳録』の引用も『六朝事跡編類』からの孫引きではないかと疑われる。

(21) 『通鑑綱目』巻三三、『方輿勝覧』巻一四、『輿地紀勝』巻一七。後の『大明一統志』巻六も同じ。

(22) 『資治通鑑』巻一二七胡注「蔣侯蔣子文也。廟食鍾山。吳孫氏以其祖諱鍾、改曰蔣山」。同巻一六一胡注「鍾山即蔣山。吳孫權立蔣子文廟於是山。又以其祖諱鍾、改名蔣山」。同巻一七七胡注「『輿地志』古曰、（中略）孫氏都秣陵、以其祖諱鍾、因改名蔣山」。

(23) 『山堂肆考』巻一四九は『金陵図経』を引き、「權因避祖諱、改鍾山爲蔣山」と記す。あるいは『六朝事跡編類』からの孫引きか。

(24) 『天中記』巻七は、徐爰『釈問略』を引き蔣子文の故事と鍾山改名に触れ、さらに『吳録』からの引用として「大帝祖諱鍾、因改名曰蔣山」と述べた後、「蕭子贇李白金陵歌注云、大帝爲子文立廟、子文祖諱鍾、改名曰蔣山。一統志亦云誤」と記す。

(25) 『江南通志』巻二〇〇「蔣山」の項に、「輿地志、鍾山又名蔣山、漢末秣陵尉蔣子文討賊戰死于此、吳大帝為立廟、子文祖諱鍾因改蔣山、明一統志與舊志並採其説、按胡三省通鑑注言孫權祖諱鍾、蔣山之名當因是而改。二説互異然、詳考之胡説爲長」と見える。

(26) 『四庫全書総目提要』巻四五『三国志』。

(27) 呉を称揚したものに「鼓吹曲」（『宋書』巻二二「楽志四」）の存在があるが、これは軍の士気を発揚し、宣伝戦の一翼を担うという性質のものであり（金文京氏『三国志演義の世界』六七～七二頁参照、東方書店、一九九三年）、後世から見た呉への共感というにはあたらない。また、六朝期の史家の呉に対する観点について述べた論考に、宮崎雄介氏「裴松之の呉興亡論」（アジアの文化と思想の会『論叢 アジアの文化と思想六』一九九七年）がある。分裂国家である六朝期の史家にとっては、呉の歴史は現在進行形の歴史として認識され、呉の亡国の理由を踏まえて未来への提言としようとする意識が強かった、と指摘する。

志怪小説·類書等に見える鍾山改名の由来に関する簡表(晋～明)

時代	書名		鍾山改名の理由		出典(備考)
晋	捜神記	巻5	蔣子文	——	
唐	北堂書鈔	巻160	蔣子文	——	釈門略
	芸文類聚	巻7	蔣子文	——	釈門略
		巻79	蔣子文	——	捜神記
	初学記	巻8	蔣子文	——	丹陽記
	建康実録	巻1	——	——	(孫鍾の名は見える)
	元和郡県志	巻26	蔣子文	——	
北宋	太平御覧	巻41	蔣子文	——	金陵図
		巻882	蔣子文	——	捜神記
	太平広記	巻293	蔣子文	——	捜神記·幽明録·志怪等
	太平寰宇記	巻90	蔣子文	——	金陵図
南宋	能改齋漫録	巻9	蔣子文	——	丹陽記
	六朝事跡編類	巻上	——	孫鍾	呉録(?)
		巻下	——	孫鍾	金陵図経
	金陵百詠		蔣子文(祖父)	——	輿地志
	錦繍萬花谷後集	巻六	蔣子文	——	丹陽記
	通鑑綱目	巻29	蔣子文	——	
		巻33	蔣子文(祖父)	——	該当箇所直後に輿地志を引く
	景定建康志	巻17	——	孫鍾	
		巻44	蔣子文	——	捜神記
	方輿勝覧	巻14	蔣子文(祖父)	——	輿地志
	通鑑·胡三省注	巻94	蔣子文(祖父)	孫鍾	(孫鍾説を支持)
		巻127	——	孫鍾	
		巻161	——	孫鍾	
		巻177	——	孫鍾	
元	至大金陵新志	巻1	——	孫鍾	
		巻5上	——	孫鍾	
	分類補註李太白集	巻7	蔣子文(祖父)	——	
	蔣神霊応(雑劇)		蔣子文	——	
明	大明一統志	巻6	蔣子文(祖父)	——	
	山堂肆考	巻16	——	孫鍾	
		巻139	——	孫鍾	
		巻149	——	孫鍾	金陵図経
	天中記	巻7	——	孫鍾	呉録(?)(蔣子文の祖父説を否定)
	文章弁体彙選	巻575	——	孫鍾	明·宋濂「遊鍾山記」
	図書編	巻60	——	孫鍾	